

第37号

# 有機健康 つうしん

遠赤青汁通信 (H29.4.1発行)

今だからこそ、広げよう世界へ！  
平和の心を桜にのせて届けます。



遠赤青汁株式会社

〒791-0398 愛媛県東温市則之内甲2225-1  
TEL フリーダイヤル 0120-148-162  
ホームページ <http://www.enseki.com>

## 「桜祭りミャンマー」に参加 スー・チー氏と共に陽光桜を植樹しました。

一月二十九日、ミャンマー・ホテル観光省と日本・ミャンマー友好議員連盟が共同で主催した「桜祭りミャンマー」が、ミャンマーの首都ネピドーで開催されました。

植樹式には、スー・チー氏や、桜を寄贈した日本ミャンマー友好議員連盟の逢沢一郎会長らが出席しました。

記念式典では、アウン・サン・スー・チー国家最高顧問が、「この桜は、我が国を一層美しくしてくれるだけでなく、平和のシンボルとして、我が国の平和を後押ししてくれる」と演説し、

高岡と共に陽光桜の苗木を植樹しました。

この模様は、海外ニュースとして翌日には全国放送されました。二日に渡り放映されたので、「テレビで見たよ。社長さん、頑張ってるね。」と多くのお客様からお電話をいただきました。ありがとうございました。

### ……記事抜粋……

『植樹された桜は、戦場に教え子を送ったことを後悔した愛媛県の教師が、戦後、品種改良を重ね作り出した「陽光」という品種です。』



アウン・サン・スー・チー氏と高岡。お会いしてみると、美しく品のある物腰の中にも、時代を生き抜いてきた迫力、特に眼力を感じたそうです。ちょっと緊張気味。

この品種は、世界各地に鎮魂と平和を祈って植えられていると言うことです。式典には、この品種を作り出した教師の息子で桜の研究家の高岡照海さんも招かれ、「ミャンマーでは日本人も十六万人が亡くなったと聞いています。その人たちに桜の木になって平和を見守っていただきたい」と話していました。

桜は今後、合わせて一、〇〇〇本が植樹されることになっています。』

ちょうど一年前、愛媛県の商工団体主催でミャンマーを訪問した高岡。初めて日本人墓地に「陽光」を植樹させていただきました。太平洋戦争では愛媛県から約八千人も出征しており、そのうち五千五百人が命を落しました。

高岡の亡父正明は、戦地で亡くなった教え子の鎮魂にとこの陽光を育てました。激戦地であったミャンマーは、高岡にとっても特別な思いを重なる土地なのです。

この「桜祭りミャンマー」は、これから毎年続けられることが決定しました。また今秋、ヤンゴンの旧国会議事堂からパゴダ(慰霊塔)まで約一キロメートルに渡り、陽光が植えられる予定です。

今も一部の少数民族との内戦が続いているミャンマーですが、「陽光」の平和への願いと共に、人々の心にも花を咲かせてくれればと願います。



スー・チー氏自ら、植樹した陽光に水をかけていただきました。



左からさくら振興議員連盟の渡辺博道幹事長、日本・ミャンマー友好議員連盟の逢沢一郎会長、アウン・サン・スー・チー氏、高岡、ホテル観光大臣ウー・アウン・マウン氏。



高岡もネピドー市長ミョー・アウン氏と一緒に植樹させていただきました。ミャンマーの民族衣装を着用されています。巻きスカートの様な感じで腰に布を巻いていて、男性用は「パソー」、女性用は「タメイ」と言います。※総称して「ロンギー」とも言う。



式典に参加された皆様と記念撮影。スー・チー氏はじめミャンマー・ホテル観光省の皆様、日本から参加した日本・ミャンマー友好議員連盟の逢沢氏(高岡の向かって右)と今回のイベントを支援していただいた汎アジア産業振興協会の薄井氏(高岡の向かって左)と高岡。



ミャンマーは、宝石の産地でも有名です。植樹式の前日、宝石博物館を訪れ、高岡も記憶の栄誉を賜りました。

国賓級の方々でなければ記憶は出来ないそうです。大変な歓迎を受けていたと恐縮していました。



ミャンマーの国内新聞でも、「桜祭り」の植樹式や記念式典の様子が大きく報道されました。



# 農地再生に

## 挑む

愛媛県西条市丹原町の圃場には、日本最大級のソーラーシェアリングが広がっています。太陽光発電という、屋根の上に設置されているパネルを想像することが多いと思います。太陽光発電をしながら、その下の農地で作物を栽培する、土地を発電と農業でシェア（共有）するという意味で、ソーラーシェアリングと言われます。

再生エネルギーの買い取りが始まった当初、収入を求めて農地を宅地に転用してパネルを設置する農家も増えていきました。農地に砂利が敷かれて太陽光パネルが敷き詰められ、山の斜面も住宅の間の隙間にも、所狭しとあの黒いパネルが設置されていきました。出張の際に、飛行機の窓からこの地域を見下ろすとキラキラと光るパネルの多さに驚いたものです。



昨年完成した、日本最大級の広さを誇るソーラーシェアリングの圃場。



面積が広くパネルも増えると発電量が増します。そのため機材も大型化しています。通常使用する機材はコンパクトなので、設備だけでも大迫力です。



ビジネス実習に参加した東温高校商業科の皆さんが、貯水タンクにかわいい絵を描いてくれました。

「農地再生に挑む」では、放置された農場を再生し、有機圃場として生まれ変わる様子をシリーズとしてお伝えしていきます。

二〇一三年四月一日に農水省から「営農を継続しながらの太陽光発電設備の農地転用について」のガイドラインが公表されました。これにより、支柱の基礎部分については、一時転用許可の対象とする旨が認められました。

遠赤青汁では、耕作放棄地となった農地を借り受け、作物が育つ農地として維持管理する農地再生事業に二〇〇〇年から取り組んできました。耕作放棄地が増えるのを防ぎ、地域の農業衰退に歯止めをかけたかったという思いから始めましたが今なお、耕作放棄地は増え続けています。農家の高齢化に加え、農業収入が厳しくて、子供に後を継げとは言えないと離農する農家さんが増えているのも事実です。

ソーラーシェアリングは、農業生産と共に、太陽光発電での収入が望めます。安定的な収入を確保しながら、農業を続けていける。後継者育成、新規就農者も

丹原地域はあたご柿の産地なので、柿はわかるのですが、リヤカーを引っ張るのはイノシシ？



ソーラーの下で育てられる陽光桜も！高校生らしい、明るくユニークな絵で農場を元気にしてくれます。



増やせ、地域の農業復興にも繋がると考えます。

電力の買い取り価格が下がり、当初の試算からは大きく損失を抱える業者も増えてきました。倒産により太陽光発電設備が放置される事態も起きます。こうした中、ソーラーシェアリングによる農業との共存は、まだまだ可能性を秘めています。

これからも、地域の農業を支えつつ、新しい農業にも積極的にチャレンジしていきたいと思います。

## 木下さんの有機の話

「菊芋は、一年目が一番大きいんですよ。」と木下さん。

私は素人なので、芋の成長は何年も寝かしたらそれだけ大きくなると思っていたので、聞いたときはどうして？と不思議に思いました。

菊芋は毎年、植え替え作業を行います。一旦掘り返して、またそれを種にして植え付けるのです。

今日、掘り返していたのは二年もの。手に取ってみると、まだまだ小さいなと感じます。金平糖みたいに、表面にたくさん角状の突起が出ているのが特徴です。



## どうして菊芋と呼ばれるの？

菊芋は小さな黄色い花を咲かせます。この花が菊に似ていて、芋が出来るので、「菊芋」と呼ばれるようになったそうです。主成分は多糖類イヌリンを含む食物繊維で、通常の芋類と異なり、デンプンはほとんど含まれないことから、糖尿に良いとされて栽培が広がっています。また、イヌリンは血糖値の上昇を抑制するなど生理作用が期待されており、欧米では糖尿病患者の食事に用いられています。菊芋はイヌリンが豊富に含まれることで、注目されています。

毎年、掘り起こすのは土の元気を戻すためです。芋は土の栄養を受けて育ちます。土を作り直すことで、さらに二年目、三年目と成長を続けます。二年目に植えた芋が親になって、株分けして育ちますので、芋の大きさは小さくなるのです。ぎゅっと栄養を閉じ込めた菊芋。まだまだこれからの素材です。



深く掘り下げ、芋を傷つけないようにと小型バックホーが活躍します。鍬で全部掘り返すよりは楽なようです。



土を掘り返して、芋を探します。掘り返す土が多いので、上手に探さないと見落としてしまいます。



# EVENT

「健康博覧会2017」  
 (二〇一七年二月十五日～十七日)  
 「国際PB・OEM展」  
 (二〇一七年二月二十一日～二十四日)



機能性表示食品の青汁は希少。お客様からの質問に、しっかりとご説明させていただいています。



バイヤーさんと意気投合すると、こんなに朗らか。商品の良さを理解していただくと、自分のことのように嬉しくなります。

健康博覧会は、「健康・美容」に焦点を絞った国内最大級の展示会で、毎年来場者が約四万名訪れています。医療費増大や高齢化社会を背景に、病気になるという考えが、健康を維持しようという考えが、多くの生活者に浸透しています。

昨年届出が認められた機能性表示食品「有機遠赤青汁V」は、その開発を支援する愛媛県の補助事業の中で、第一号の取得でした。その縁もあり、機能性表示食品の開発に取り組み愛媛県内企業の紹介の一環として、えひめ産業振興財団の「えひめ県ブース」に出展させていただきました。商品や原材料の紹介をさせていただきます。



健康博覧会では、愛媛県のゆるキャラ「みきゃん」も大活躍。

続いて翌週に行われた国際PB・OEM展にも出展しました。プライベートブランド(PB)・OEM・業務用の製品・サービスが世界中から一堂に出展する、商談展示会です。単独ブースにて、当社の取り組みを紹介させていただきまし。開発中の素材への好評価もいただきました。

お客様の健康をお手伝いできる商品を、数多く市場にお届けできるように、今後開発に努めます。

※OEMとは、他社ブランドの製品を製造すること

## 《商品の特徴》

- 1.愛媛県産温州みかん100%
- 2.全果(皮・実)まるごと使用
- 3.無添加・無着色・無香料



30g入り 各540円(税込)

βクリプトキサンチンは、特に温州みかんの皮に多いと言われている色素成分で、様々な分野で研究されています。漢方でも使われるみかんの皮(陳皮)は栄養素の宝庫です。まるごと摂取することで栄養価が高まります。

## 「βクリプトキサンチン」

その注目された成分とは？

健康志向の高まりに合わせて、テレビ番組でも、素材の成分に注目した紹介を行うことが多くなりました。最近では、テレビで見ても、気になったらインターネットで検索し、即座に商品を注文するスタイルが流行の様です。

今回当社のネット通販で突然、大ブレイクしたのが「みかんパウダー」と「みかんフレーク」です。

正直言いまして、知る人ぞ知る程度の認知度だった商品です。それが一晩で百個も注文が来たのでビックリでした。



みかんパウダー  
みかんフレーク



## 四国八十八箇所 十五番札所

## 薬王山 国分寺

(やくおうざん こくぶんじ)

徳島市国府町矢野718-1



奈良時代に聖武天皇の勅願によって、66カ国と3島に一寺ずつ建立された「国分寺」。当時は疫病の流行や飢饉などが相次ぎ、民衆の暮らしの安定した時期ではありませんでした。そういった時代背景のなか、五穀豊穡・国家鎮護の願いがこの国分寺建立には込められており、四国にはそのすべてが現在でも寺として残っていて、札所に加えられています。

ここ阿波の国の国分寺周辺は古墳も多く、国府町の名が示すとおり、阿波の文化の中心地でした。近世の再建ですが、天平の薨を彷彿とさせる本堂や境内が歴史の重さを感じさせてくれます。非公開ですが、庭園も隠れた名所となっています。本堂の横にある堂に祀られているのは烏瑟沙摩(うすさま)明王。「トイレの神様」とでもいいましょうか、そのお札を便所に貼れば「排尿に関する病」に効果があると伝えられています。



## 陽光桜をミャンマーへ〈検疫から植樹までの大奮闘〉

高岡の亡父正明氏の代から、鎮魂と平和への想いを込めて海外へ贈られた陽光桜は約二万本、国にして二十八カ国になります。過去には苗木が贈れず種を送った地域もありました。

苗木を送る場合、まずは空港で検疫を受けます。国に有害な虫や病気を持ち込むことは出来ないため、検疫は厳しく行われています。日本から送る場合、根から土を落とし、さらに水洗いを行って状態を確認してから国際郵便で送ります。

今回、ミャンマーへは高岡自ら苗木を持ち込み、ヤンゴン国際空港で検疫を受けました。検疫官立ち合いのもと、通訳を交えて確認作業が続きます。もちろん海外へ苗木を送るのは、初めてではありませんので、十分な準備をして来ています。無事に植樹用の苗木は合格し、入国出来ました。

していましたが、実際に土を確認しないと、陽光を植えてもちゃんと育つかわかりません。公園局に赴き、用意された土や肥料、さらには今後の生育についての注意点を管理担当者に指導させていただきました。国の顔とも言える大統領官邸前への植樹です。育たなかったでは済まされません。管理担当者も真剣な面持ちで、高岡の説明に聞き入っていました。

式典前日には、実際に植樹を行う現場で苗木え、穴の深さや盛り土の高さをチェックしました。いざ植樹を行ってみると想定していた以上に日差しが強いことが分かりました。ミャンマーの雨量は日本の五分の一しかなく、乾燥と直射日光が懸念されます。陽光は暑さにも寒さにも強い桜ですが、苗木のうちに土がすぐに乾いてしまつては活着（根付くこと。二、三年かかる）も悪くなり枯れてしまつ恐れもあります。そこで日本でも農業ではよく利用される寒冷紗（かんれいしゃ）を苗木の上に張り、日差しを和らげることにしました。

今回は「桜祭りミャンマー」の開催に合わせて首都ネピドーに植樹させていただきました。ヤンゴンにも今後、千本の陽光桜を植樹させていただきます。旧国会議事堂からパゴダ（霊廟）までの約一キロメートルを桜並木にする計画です。また、毎年桜祭りをを行い、今回植えたネピドーの大統領官邸前から更に新国会議事堂まで、陽光を植え続けていく計画が決定しています。平和の桜、「陽光」がその名のごとく美しく咲き、ミャンマーを照らし続けてほしいと願います。



植樹の確認作業が終わって公園局長(高岡左隣)らと記念撮影。陽光桜親善大使のこおり健太氏もご同行いただきました。(左手1人目)



質問を受けながら、検疫を受ける陽光の苗木。日本で土を落とし、きれいに水で洗ってから新聞にくるんで運びます。



運ぶ途中で曲がっていますが、ちゃんと真っ直ぐに戻ります。苗は元気に到着しました。



苗木を手に、植樹についての説明を行う高岡。日本から作業着を持っていくところが、やる気満々です。



事前のやり取りで用意された土を確認しています。たい肥の配合の見極め具合など重要なポイントを伝えます。



直射日光を避けるための寒冷紗を苗の頭上に張っていきます。高さ調整も通訳を通して。



苗木の植え方を指導する高岡。熱中してくると、つついシャツも腕まくりです。

〈ミャンマーの常識〉パゴダでは裸足



パゴダ(Pagoda)とは仏塔(ストウパ)を意味する英語ですが、日本では主にミャンマー様式の仏塔のことを意味します。

日本の仏塔と同様、仏舎利(釈迦仏の遺骨等)または法舍利(仏舎利の代用としての経文)を安置するための施設です。

ミャンマーの人々にとって、パゴダは釈迦がいなくなつて以来、釈迦に代わるものであり、「釈迦の住む家」であるとされます。従ってパゴダを建てることは、ミャンマーでは「人生最大の功德」とされ、そうすることにより幸福な輪廻転生が得られるとされます。

「釈迦の住む家」であるパゴダに入るときは履物を脱ぎます。靴や靴下(ストッキングを含む)を履いて入ることは許されません。弊社のミャンマー研修生も、お寺として紹介された建物に入る時には、どんなに寒くても裸足になります。やはり身につけているんです。

おたより広場にメッセージをお寄せください!!

〒791-0311 愛媛県東温市則之内甲2225番地1 遠赤青汁株式会社 ※お寄せいただいたお便り等は、その他の目的で使用することはありません。

有機健康つつしんおたより広場 係あて mail:aojiru@enseki.com

